

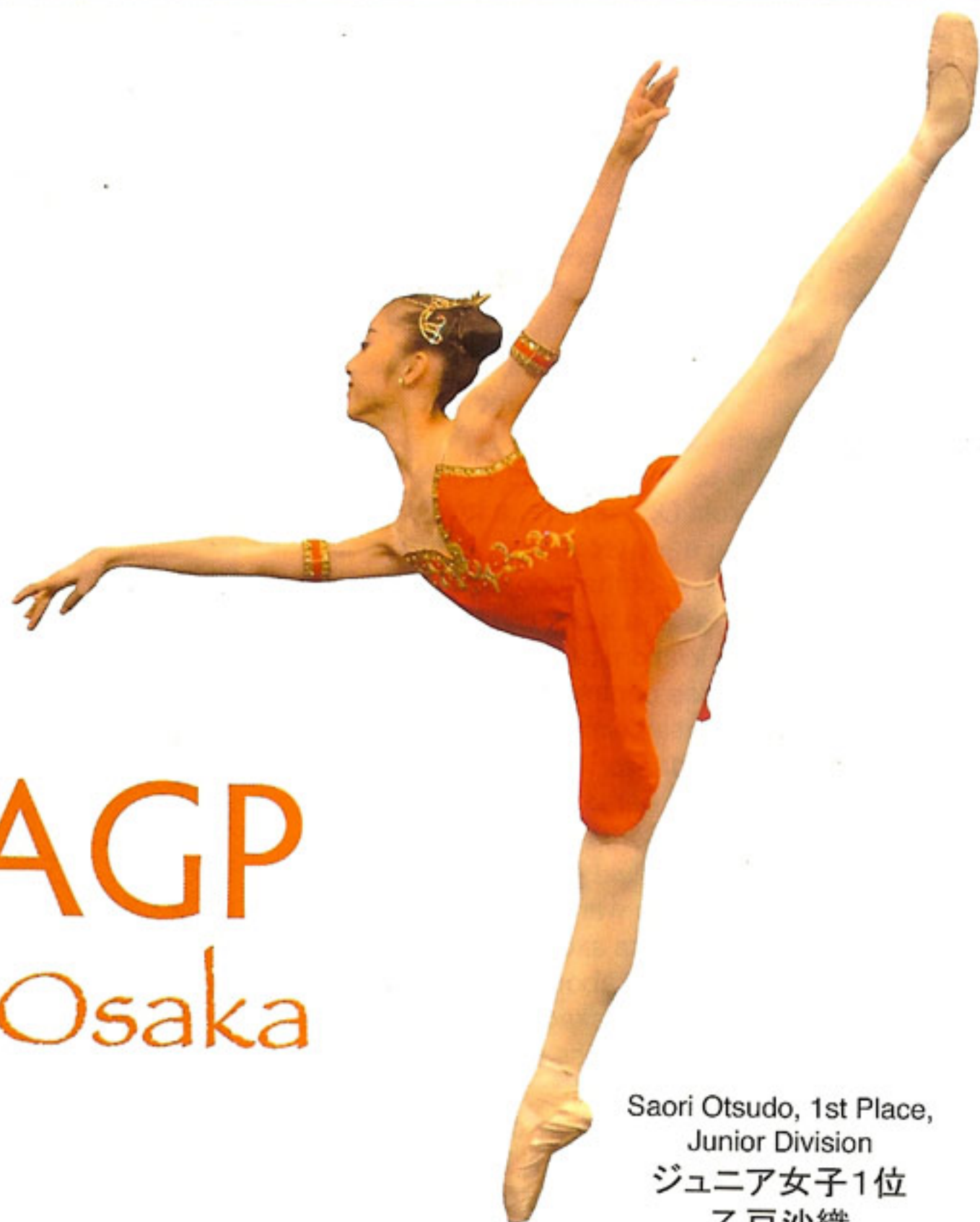


Yuuka Sagawa - winner of Dance Europe's Outstanding Artistry Award

佐川裕香

三重県出身。5歳のときに小原芳美バレエ・スタジオでレッスンを始める。YGAP日本予選には過去4年連続して出場し、ミュンヘン、カリフォルニアのスカラシップを獲得。今年はニューヨーク本選への出場をかけた大阪での準決勝に臨み、主催者によるクラスでも大きな満足感を得たという。「今まではテクニックに集中してきましたが、ジェイソン・ビーチ先生のクラスを受けて、音楽性と“踊る”ことが技術と同じくらい大切なのが判りました。」クラスでも彼女の注意力とフィニッシュを大事にする点は際立っており、『ライモンダ』ヴァリエーションのすばらしいコントロールとともに、ダンス・ヨーロッパ賞受賞の理由となった。受賞を知ったときは、「信じられませんでした。すごくうれしかったです。ファイナルでは予選よりもうまく踊れたと思います。『ライモンダ』を選んだのは、去年他の出場者の方が踊るのを観たから。その方がとてもきれいだったので、私も同じソロを習いたいと思いました。」憧れの存在は中村祥子で、彼女の所属するベルリン国立バレエに入るのが夢。そして好きな作品は『ドン・キホーテ』とのこと。

YAGP in Osaka



Saori Otsudo, 1st Place,
Junior Division
ジュニア女子1位
乙戸沙織

Translation by YUKI NAGANO

今月号の日本語ページは、尼崎で行われたユース・アメリカ・グランプリ(YAGP)日本予選(準決勝)の特集です。コンクールに合わせて本誌編集長エマ・マニングが来日、才能溢れる日本の若手ダンサーについてレポートします。

信号が赤の間、自転車はおろか歩行者も辛抱強く歩道のへりで待っている。ロンドンで車の波の間を急いですり抜けていくのに慣れた身には、現実とはにわかに信じがたい光景ですが、日本人のこの規律正しさは、持って生まれた資質であり、と同時に成長の過程で育まれたものでもあるのでしょうか。規律は、日本のあらゆるところに見出せます。技術、料理、そしてバレエにも！

日本がどれほど熱心にバレエに取り組んできたかは、大阪からほど近い尼崎において610名、11団体の参加を得て開催された今年のYAGP準決勝の様子にもはっきりと示されていました。全日程にわたって取材することは叶いませんでしたが、最終日の決勝に進んだジュニア部門、シニア部門の全参加者の演技を見て、トリプルのピルエット、シルヴィ・ギエムばりの6時のポーズといった高度な技を多くの参加者が当然のようにこなしているという、技術水準の高さにまず強い印象を受けました。けれどもそこから、一部の教師は熱心さのあまり生徒をプッシュしすぎているのではないかと、また芸術的なスタイルを犠牲にしても体操的な技巧を重視しているのではないかと感じたのです。たとえば、オーロラのヴァリエーションの出だしの、ルルヴェ・アティテュード。『眠れる森の美女』でのプティパの振付では、頭より高くつま先を蹴り上げることなどより繊細さと抑制の方がはるかに重要なのであり、このアティテュードでの後ろの足は、決してプティパの美意識に反するものであってはならないのです。

YAGPの参加者は、幅広い選択肢の中から古典の課題曲を選ぶことができますが、今年多くの少女達を選んだのは、飛び込むようなパンシェ・アン・ポワントの含まれる『ダイアナとアクティオン』のヴァリエーションでした。若い参加者の中には、180度開脚してのバランスを見せた人も何人かありましたが、ジュニアの1位に輝いた乙戸(おつど)沙織も、この曲を選んだひとり。バレエ向きの身体条件と強い技術を持つダンサーです。2位は柴平(しばだいら)くるみ、彼女の黒鳥は、12歳というのが信じられないほど洗練されていましたが、チュチュ

がやや装飾過剰だったのが残念。そして上西加奈美が、コントロールの効いた『パキータ』のヴァリエーションで3位に入りました。

男子の出場者数は女子に比べるとずっと少なかったのですが、ジュニアの何人かは際立って優れた力量を示し、またシニアに比べリラックスしているように見受けられました。13歳の藤島光太は、6回転をやすやすと見事にこなして1位。山本雅也はフランチを端正に踊り、優れた音楽性で2位を勝ち取りました。3位は玉川貴博、最後のスピンはよくコントロールされて伸びがあり、印象的でした。

ジュニア女子のその他の出場者では、石川まどかの生き生きとしたディアナ、一見はかなげに見える白井沙恵佳が堂々と踊ったドゥルシネア、そして長島弘奈のスワニルダの誇らしげなグラン・フェットレを楽しく観せてもらいました。長身でエレガントな徳島沙綺が『海賊』で見せた軽やかな跳躍、直塚美穂の正確さと表情も、私たちの心を惹き付けました。

シニア部門女子の優勝は19歳の小笠原由紀。難しい技もやすやすとこなす技術を持った、魅力的なダンサーです。審査員のひとりでパルッカ・シューレ・ドレスデン校長のジェイソン・ビーチはとりわけ彼女を気に入り、本国のゼンパー・オパー・バレエ団監督アーロン・ワトキンに急いで電話で連絡。研修生としての即時入団契約をオファーするに至りました。2位の池田理沙子は、『海賊』での力みのない自然な技術と音楽性を評価され、流れるようなジュテを見せた山内未宇が3位でした。

シニア男子は、最優良からあまり感心できないレベルまで、出場者の力量に大きなばらつきがあるのに驚かされました。もちろん、入賞を果たした3人については、何の不満もありません。3位の高田樹(たつき)のバジルはたいへん洗練されたプロのレベルのものでしたし、2位の吉本絃人(げんと)の『パリの炎』は滑らかなターンが魅力を添え、1位の佐藤航太のバジルは、15歳という年齢が信じられないほどみごとな表現になっていました。

シニア部門のその他の出場者では吉村茜の爽やかなキューピッド、池田理沙子の花が開いていくのを見るような『海賊』、山本怜のエレガントなオーロラ、土田明日香のチャームングで技術的にしっかりとしたスワニルダ、そして佐川裕香のフレージングの美しい、また芸術的にもしっかりとした自覚を持って踊られたライモンダが目を引きました。バレリーナとしての大きな可能性を秘めた佐川は、わずか15歳。彼女の傑出した芸術性に対し、本誌からダンス・ヨーロッパ賞を贈呈しました。

この準決勝を通過した出場者全員が、来年2009年4月17～22日にニューヨークで開催される、バレエを学ぶ生徒達のための世界最大規模のコンクール、YAGP決戦に進みます。

Tatsuki Takada, 1st Place, Senior Division

シニア男子1位 高田樹

